

同人誌 第41号 (2017年12月登録)

風 狂

風 狂 の 会

風狂第41号目次

詩

こま狛の空	出雲 筑三
歴史探訪	高 裕香
アデュー宣言	高村 昌憲
太陽	なべくらますみ
弔歌	原 詩夏至

風狂ギャラリー

三浦逸雄の世界（二十五）	三浦 逸雄
--------------	-------

エッセイ

閑居の弁	北岡 善寿
謝罪は美徳か悪徳か	神宮 清志

覚書

風狂の会 川柳忘年会報告	原 詩夏至
--------------	-------

翻訳

アラン『大戦の思い出』（七）	高村 昌憲 訳
----------------	---------

執筆者のプロフィール

読者からのコメント（2017年11月号）

こま^{いぬ}狗の阿は空を視上げている
空は青かった
昨日の青より少し濁っているが

これは何かの錯覚だ
だって一年ぶりにきた渡り鳥は
うす黒いと言っている

玉座さまにお伺いすると
青い空だよと ひくひく笑った
だが虚ろな眼は何かを知っている

いつまでポカン口を開いている
どこからか聲がした
足許を見よ お前の足許だよ

一途に働いてきた人生
いつの間にか地中に埋めてしまった
お地藏さまの柔和な顔

空はいつまで 青いままだろうか
海はいつまで 我慢してくれるのか
畔はきっと唇を嚙んだままだ

だれしも 一度は自身に問いかける
私はどこから来て どこに行くのだろう
そうして・・・ 自分探しの旅が始まる

師走の天理市石上神宮を訪ねる
色とりどりの紅葉の木の葉が
風に吹かれて寄り添い、舞って寄り添う

鳥居をくぐれば
「お帰りなさい」と コケコッコー
「人が恋しい」と コケコッコー

南北に通ずる「山の辺の道」
日本最古の古道で
柿本人麻呂が、愛を語った

人恋しさに我も袖をふりふり
渡来人の息づかいをかみしめ
また、独り旅を続ける。

ピアノ演奏家が舞台上でピアノを演奏する様に
詩人は創作した詩を皆の前で読んで良いのか？
舞台俳優が舞台上で登場人物の台詞を言う様に
詩人は玩味する詩を皆の前で読んで良いのか？

詩人は楽器を演奏する人でも演技者でもない
人間の悲しみと喜びを感じて味わう人である
生まれた儘の感情を叫んで演じる人ではない
情操にまで高めた高邁な言葉で表す人である

十九世紀頃まで大半の庶民は文字が読めない
詩の世界を知るために庶民は口で伝えたのだ
文字を知らない人は詩の朗読を聞くしかない
詩は感情の文学だから朗読でも役立ったのだ

バスチーユを目指して叫ぶ言葉は政治である
人々が集まり高揚とさせる感情に詩心はない
お祭り行事の朗読は詩の言葉が宣誓文になる
海に太陽が沈む様に詩の言葉は喧噪ではない

識字者が声を出して読む朗読は呪文と同じか？
詩を読む時は静謐に情操の詩句を黙読しよう
詩の朗読は自己満足を目指す芸になったのか？
詩を不本意な号令に変える朗読よ！アデュー

夕陽を見ようと車を走らせた
数人の友だちを誘い岬へと
松林を抜け
見えてくる海岸線

日の入り時間が迫る
はやる気持ちを抑えようとはしたが
久し振りの
天気の良いさがうれしかった

岬の突端に着いたとき
赤い陽は周囲を染めて
海のおもてを目差し一筋に向かっていた
わたしたちは
思わず胸元に手を結び
その力強さに引き込まれていく

丸い顎からゆっくりと
頬を浸し
耳の辺りへと
ゆらゆらと燃えながら

頭まですっかり隠れてしまった
光りは少しも衰えず
水面を深い色に変えて

海の底へと気持を奪われた人たちは
声をなくし
足元の波が小さく揺れた

衝突は不可避だ
なぜなら
冰山は遍在するのだから
先日
北の海では
西の客船が
瞬く星空に尻を突き上げて
頓死した
突き上げたのが手ではなく尻なのは
神へのせめてもの抗議の仕草なのか

(海にいるのは
巨船よ あわて者よ
あれは乗客ではないのです
海にいるのは
あれは波ばかり)

その後
南の海では
東の戦艦が
輝く太陽に赤腹を晒して
憤死した
晒したのが首ではなく腹なのは
誰へのせめてもの帰伏の仕草なのか
だが
それも不可避だ
なぜなら
敗北は遍在するのだから

(空にいるのは
巨艦よ おろか者よ
あれはグラマンではないのです
空にいるのは
あれは雲ばかり)



三浦 逸雄 「郊外の午後」 6号（麻布・油彩）

その詩は「心賤しい者が／世の中で権力を持つ／今は実に嫌な時代だ」で始まっていた。誰がみても解るように、この詩は花鳥風月を主題にした抒情詩ではなく、政治批評の詩である。ここで問題になるのは、「心賤しき者」が誰であるかである。世界は今や電波のお陰で広いようで狭い。どこの国であろうと、政治の頂点に立つのは権力者だが、その中に「心賤しき者」が現にいるというのである。それが次の連で影絵のように映し出される。

「世界の頂点たる国の大統領は／平和と協調を重んじることなく／欲望に任して国を動かし／常識ある側近がそれを諫めれば／更迭する浅ましさをもち」として槍玉に挙げられているのはアメリカの権力者であり、「貧困にあえぐ国の大統領は／軍事力をアピールするため／高額のみサイルを発射し続け／民衆の生活の安定など／殆ど顧みない愚かさを見せ」は北朝鮮の三代目の権力者である。

「更にその隣国の政府は／曖昧にすれば大丈夫と／所在が分からなければ問題ないと／不正と隠蔽を国ぐるみで繰り返す／恥知らずな姿を晒している／ある意味モンスターだ」

これは美しい国を標榜する我が瑞穂の国の権力者である。

この詩は四連で終るが、その連は政治批評とは関係がないので省略する。

さて、世間の狭い小生が些か気に留めるのは、最初にある「心賤しき者」という存在である。辞典によると「賤しい（卑しい）」とは、「①（食物などに）がつがつする。欲望をあらわにして、さもしい。② 下品だ。げびている。③ 粗末だ。みすぼらしい。④ 身分が低い」。このうち④はともかく、①と②は「心賤しき者」に当てはまりそうである。昔風に言うとも一国の権力者にのし上がるとは、天下を取ることである。「心賤しき者」であったかどうかは当方の知るところではないが、史実として身分低くして天下を取るに至ったのは、戦国時代の木下藤吉郎であり、昭和の敗戦後ではロッキード事件で失脚した今太閤こと田中角栄である。身分が低いから天下を狙ってはいけないという法はないようである。古代中国では、豚飼いかから一国の宰相になったものがあると中国文学の吉川幸次郎博士は著書の中に書いておられるが、その男には野望があったのではなかった。優れた人材であったので、時の政府が放っておかなかつたのである。それが権力の階段を上り始める端緒であった。この豚飼いが「心賤しき者」であったという悪評は聞こえてこない。

脱線したが元に戻って、もう一つ先日読んだ詩誌の中から、昨今の政治状況を批判している作品を取り上げて見よう。

「厚顔の独裁者の顔がテレビに映ると／握りしめた拳を画面に叩きつけたくなる／またもや数の暴力で 怖い「共謀罪」法を通してしまった／異論を唱える者は与党に一人もいない」

これは詩人による政権の不正の告発である。不正を告発されると、政権は告発者を捕えて投獄する。韓国の詩人金芝河がよい例である。軍事政権の頃だから驚くに当たらない。かつての日本なら憲兵政治である。そういう歴史の命脈は絶えてはいないのである。戦後の歴史を見るとよい。敗戦国の指導者たちは、戦争犯罪人として戦勝国から裁かれ、その多くはA級戦犯として処刑されたが、その他の者は巣鴨拘置所に投獄された。その中に戦時中商工大臣を務めた岸信介がいた。何年そこにいたのかは知らないが、岸はいつの間にか釈放されて政界に復帰し、六十年安保の時には総理大臣であった。この岸との関連で言うと、巣鴨に入っていた者の中に赤木術平が

いた。赤木はかつて漱石のところに入出入りしていた文芸評論家で、遊蕩文学撲滅論を読売新聞に発表したことで名が残っているのだが、やがて文学の世界から足を洗って政界に入り岸の信奉者になった。その関係もあってか、赤木も戦犯として拘置所に収容され、昭和二十五年に獄中で病死した。二十五年は日米講和条約が締結された年で、赤木は条約締結前に世を去ったのであろう。生き延びた者は釈放の恩恵を受けたことになる。岸の再出発がそこにあった。その岸が取り組んだ難関は安保条約の改定であった。激しい反対運動が起り、岸は暴漢に大腿部を刺されて、権力者の座を去った。それから何十年か経って「厚顔の独裁者」が誕生したという経過になるのだが、その独裁者が岸信介の孫であることは周知の事実である。

詩の二連目を出そう。

「まるで戦国時代のように／「ハハア 殿の仰せの通り」とばかりにひれ伏す家来ども／日本はいつからこんな国になってしまったのか／こんな政治家たちを選んだみんなも悪い」

主従の関係は戦国時代を例に挙げなくても、集合体として社会が発生して以来変えることはない。従者が主人の上に立てば、主客転倒で世の中の秩序が乱れる。歴史的事実としては、殿の名に値しない者が殿になると、家来の平伏は止む。しかし現代の権力者は巧者揃いである。巧言令色をもって家来を服従させるのである。大衆という家来は、古典的述語の朝三暮四で待遇が改善されたと錯覚する猿に似ているように見える。マニフェストだのアベノミックスは幸福を約束する呪文のようなもので、一向に効果が現れない。「こんな政治家たちを選んだみんなも悪い」と言ってみても、政治家と言えるほどの候補者がいない証拠として、嘆かわしい現実があるだけだと言う他ない。巧智は時代の進歩に合わせて益々発達する。明治維新に際して、戦火を交えることなく江戸城明け渡しの立役者になったのは、勝海舟と西郷隆盛だが、西郷はともかく勝には回想録とも言うべき「氷川情話」という著書があり、その中にこんな記述がある。

「政治とか経済とかいつて騒いで居る連中も、真に国家を憂うの誠から出た者は少ない。多くは私の利益や、名誉を求めためだ。世間のものは勝の老いぼれめがといて嘲るか知らないが、実際おれは国家の前途を憂へるよ」

もし海舟の言う通り「多くは私の利益や、名誉を求めため」だとしたら、独裁者に向って「異論を唱える者は与党に一人もいない」のは当然の帰結である。異論や反対論を唱えたら、利益も名誉も失って離党に追い込まれるのが関の山である。勿論これは当方の推測に過ぎないのだけれども、政治の世界は一寸先は闇と言われる通り、端から見ればスリルに充ちているのである。発達した文明の利器はリアルタイムで世界の動きを画面に映し出してくれる。厚顔の独裁者の顔がそこに写し出されるのもその一環で、見る者の血を騒がせるのである。その続きが次の連に、極めて散文的に表現される。

「国内では滅法強いが トランプのような四角い顔の男には／「ご無理ごもつとも」と尻尾を振って付いて行くあの人／核兵器禁止条約に参加しない日本／「あなたはどこの国の総理ですか」*と私も問いたい」

なかなか勇ましい議論である。この詩にある「厚顔の独裁者」としての総理の名は作品の中では一度も出て来ない。出て来なくても誰にでも判る仕組みになっているからである。総理に該当する人物で名前が出てくるのは、トランプだけだ。そのトランプに尻尾を振るとあるが、わが美しい国の総理は二〇一五年の春に、米議会上下両議院合同会議で演説を行っており、その全文が四月三〇日の新聞（朝日）に掲載されていて、安保法制については「この夏までに成就させます

」と明言している。時の大統領はオバマであった。素地は既に固まっていたのである。何せこの美しい国は敗戦国である。それも無条件降伏であった。講和条約により独立国として再び日の丸を掲げる日が到来したのだが、占領の仕組みからすっかり解放されたわけではなかった。その証拠が沖縄の現状にはっきり見て取れるのである。「ああ」と抒情的嘆息が遠くなった過去から聞こえて来そうである。どうやって生き延びて行くか。これが今ものしかかる主題なのだ。「寄らば大樹の陰」「長いものには巻かれよ」。この俚諺じみた名文句は何世紀にもわたって培われてきた民族の習性、意地の悪い標語を使えば島国根性の産物と言うべきものであろう。核の傘という大木の陰に身を寄せる他ないのが現状ではないのか。

折角だから詩の終連を出しておこう。

「あの人の言う美しい国ではなく／美しい四季に似合うような／核のない平和な国にしなければならぬ／一人一人の叡智を集めて美しい国を築かねばならぬ」

これで見ると、「あの人」はどうやら叡智を欠いた人物に変化しているように見える。それに引き換え、「あの人」を除いた一人一人には叡智があるらしい。本当に有るのか。真実一人一人に叡智と言えるほどのものがあるなら、「こんな政治家たち」と蔑むような議員を選ぶ筈はあるまい。一人一人に叡智が不足しているから、「国内では滅法強い」あの人が登場するのである。恐らく詩人は叡智の衰弱現象に腹を立て、こんな詩を書くに至ったのであろう。そしてこちらはそれに釣られて、こんなまとまりの悪い結末に到達したのである。（了）

注。最初に借用した作品は、詩誌「青い階段」一一二号掲載の石川敦氏の「野獣」。二番目のものは「青い花」第四次八八号掲載太田美智代氏の「つばやき」。

* 長崎被爆者団体代表者の言葉

大相撲九州場所は、日馬富士の暴行事件で大揺れに揺れ、その後もなかなか収まる気配を見せない。場所後日馬富士の引退届が提出され、記者会見が行われた。翌日の新聞報道をみると、引退の文字とともに謝罪がなかったという報道も目に付いた。確かに日馬富士は、貴乃花親方と貴ノ岩に対して明確な謝罪の言葉を避けていた。まず初めに「貴ノ岩にけがをさせたので横綱としての責任を取って引退します」と述べ、次いで全国の相撲ファン、相撲協会、後援会、伊勢ヶ浜親方、女将さんに対して迷惑をかけたことを「深くお詫びします」と言って親方とともに、二十秒以上も頭を下げた。この辺は日馬富士の苦心の言葉選びだったと思う。微妙な表現で謝罪をギリギリのところで留めている。暴力は貴ノ岩に対して行われたのだから、はっきり謝罪すればいいではないか、と多くの人が考えたであろう。しかしここに日本特有の文化があると思う。

二十世紀半ば過ぎ頃から盛んになっていった海外留学において、思いも寄らない出来事によって留学を全う出来ずに帰国する学生が続出した。主にアメリカに留学してのことであった。アメリカはクルマ社会であって、クルマなしには生活できない。留学生たちは国際免許を取得して彼の地に旅立っていった。交通事故というのはある程度不可避のことである。あちらは日本と逆にクルマは右側走行であり、ルールとか習慣のちがいがから色々戸惑うことも多い。問題は事故を起こしたときだ。日本人はこうしたとき「申し訳ない」という態度をとる。謝罪してしまう、自分が悪かったと言ってしまう。たとえ相手に落ち度があってもそう言ってしまいがちである。日本という風土で育てばこれが自然である。ところが国際的にはこれが大変なことになる。いったん謝罪してしまうと、どんなに慰謝料その他を請求されても断れなくなってしまう。完全に敗北なのだ。

彼の地においては絶対に謝ってはならない。事故に遭ったらまず相手の身の安全を確かめて、生命の保全に全力を尽くす、傷を負えばその手当を優先する。次にこの事故は百パーセント相手が悪いと主張しなければならない。事故に遭ったらまず「大丈夫か？」と尋ね、つぎに「自分はまったく間違っていない」と主張する。向こうも同じことを言うだろう。ここから交渉が始まるのである。こうした交渉は向こうの人は子供のときからやっているから、大いに長けている。日本人は妥協しがちである。多くは負けてしまう。それでも初めに謝罪してしまうより、はるかにましである。こうした話し合いの場において、向こうの人はしかと相手の眼を見詰めて話す。決して視線をそらさない。これも日本人の苦手とするところで、視線を合わせて果たして何秒もつだらうか。はじめから視線をあらぬ方向に向けている人も居る。日本人が国際的に強くなるには、この辺から訓練を積むようにしたほうがいい。視線をぴたりと相手の眼に据えて話すように、日頃から訓練する。

この対処法は世界の国々の常識である。日本人というのはその点において、世界に例を見ない特殊な風土の中に居る人間だ、ということをお覚しておいた方がいいと思う。まず謝ったほうが心象をよくするので交渉を進めるうえで有利だ、というのは日本だけかもしれない。モンゴルはもちろん国際規格の人々だ。よって相手がモンゴル人力士の貴ノ岩に対して謝罪することはあり得ない。相手が日本人力士だったら謝罪したかもしれない。その辺は日馬富士はじゅうぶんに心得ている。モンゴルは基本的に狩猟民族だから、争いごとならずとも人間関係は厳しい。はじめに何か与えて人間関係をよくしようとしても通用しない。ますます要求してくるようになるだ

けで、何一つ親切にしてくれはしない。日本人はどこへ行ってもまず何か与えて、相手に近づこうとする。しかしこの行為はとんでもないことになりかねない。

世界歴史を見ると、狩猟民族は戦いにはめっぽう強い。戦いは苛烈であり、殺し尽くし、奪いつくし、幾多の民族を滅ぼしてきた。農耕民族は戦いに弱く、温厚で、人情に篤い。今のモンゴル力士の活躍を見ていると、こうした違いを感じずる場面が見えてくる。これは「好む好まない」とか「善悪」の問題ではなく、こうした違いをもっているという事実を理解することこそ肝要である。そこから学ぶものがあるはずである。なのに一方的にして感情的な判断が多すぎるように思える。

裁判というものも同じである。刑事裁判の冒頭にまず検察による起訴状の朗読があつて、次に被告人の罪状認否が行われる。このとき日本では被告人は罪を認めるケースが多い。その方が裁判官の心象をよくして、有利だからだ。もっぱら恭順の意を示すのが、刑を軽くするための要領である。しかし国際的にはこれは通用しない。罪状認否で罪を認めたらそれで結審となってしまう。罪を認めたのだから、起訴状通りに刑が執行されるだけである。被告人が「無罪である」と主張して、初めて審理が始まることになる。

第二次世界大戦の直後に行われた極東国際軍事裁判において、冒頭の罪状認否に東条被告をはじめすべての被告人が「自分は無罪」と言った。しかしこの言葉を言わせるのに困難があつたという裏話が残っている。彼ら被告人は日本の軍人として、潔く罪を認めて裁きの座に着きたかったのである。しかしそれでは裁判が始まらないので、なんとしても無罪を主張するように説得するのが大変だったという。

そうした意味で日本は世界でも稀な美德をもった国である。こうした国民はエスキモーとかニューギニア高地のモニ族・ダニ族くらいしか居ないかも知れない。彼らだって今ではどうなっているか分からない。こうした文化に対して批判的な見方をする人も多いだろう。こんなことから日本人は国際的に後れを取ってしまう、これからもっと厳しくなるべきだ。おそらく多数の人がそう考えるだろうと思う。しかしなかには、日本てなんていい国なんだろうという見方をする向きもあるはずだ。世界がこれを手本とすべきではないかという意見もあるかもしれない。

しかし現実はなかなかそうはいかない。すぐに謝罪するなんてとんだ悪徳だというのが世界の常識なのだ。謝罪は神に対してするものであつて、同じ人間に対してするのは悪徳になってしまう。問題はこうした彼我の違いをほとんどの日本人が承知していないという事実だ。これはただ事ではない重大な問題なのだ。この度の日馬富士を巡る騒動でもこの見地からの論評に接することは出来なかった。

日馬富士はそうした日本人特有の文化あるいは価値観、美德の観念といったものを、日本人以上に判っていると思われる。客観的に見ることが出来るだけに、日本人の長所欠点を日本人以上に解っているはずである。あの記者会見をみていると、冷静に言葉を選んでいいる。隣の親方が涙ぐんだり、むかつ腹をたてたりしているのと対照的に、精神的に落ち着いており、頭は冴えていた。モンゴルという狩猟民族の中で育つて、日本の相撲界という伝統社会の中で厳しい稽古を積み重ね、小兵ながら最高位にまで昇った優等生である。彼が乗り越えなければならなかった幾多の苦難は、我々の想像を絶するものがあつたに違いない。それでもよく日本の習慣になじみ、その気質を理解して、多くの人に好まれる振る舞いを身につけてきた。

彼の描く絵を観ると「綺麗・細かい・分かりやすい」という画商が推薦する、売れる絵の三要

素をすべて備えている。この繊細な心、そして同時に強い心をもっていることに驚かされる。今後こうした人材は貴重になると思う。このように日本を理解している人に多大な期待を寄せたい。モンゴルと日本の、ほんとうの意味での架け橋になって欲しいと願う。（了）

風狂の会 川柳忘年会報告 (平成二十九年十二月三日 吉祥寺永谷スペース40)

こんにちは。原詩夏至です。「風狂の会」恒例の年末川柳句会。今年は、まず会場で事前に配られる無記名の詠草（詠題「野望」26句、自由詠26句）から、各自がそれぞれ、これも無記名で2句ずつを投票。その上で、

- (1) 詠題、自由詠ごとに全得票数を集計、上位から順に1位、2位、佳作各1句を選出。
 - (2) 但し、得票数が同じ場合は、参加者全員で決選投票を行い、順位を定める。
- 結果は、次の通りでした。

詠題「野望」

1位 野望なくヒマなくカネなく髭はある 武彦

そうか、髭とは野望もヒマもカネもない男が、野望とカネとヒマの代わりに蓄える、いわば清貧の凜気を纏った「風流」な嗜みだったのか……。そういうことなら、今まで無精髭以外の髭にはほとんど無縁だった私にも、一度は試してみる気概が湧いてきます。尤も、以前TVで紹介していた海外の「美髯コンテスト」は、ぐるぐる巻きの髭とか顔の四方に星型に放射している髭とか、それはもう芸術（それも前衛芸術）としか言いようのないユニークな髭のオンパレードで、野望もヒマもカネもなければ到底蓄えられないだろうものばかり。「侘び」「寂び」を旨とする筈の「茶の湯」がいつか最高の「贅沢」へと転化したのと同じ逆説が、ここにもまた一つ……。

2位 「印税で」と野望を抱き五十年 たか子

家庭教師のトライのCMによれば、「アルプスの少女ハイジ」のおんじ（おじいさん）は現在五十二浪中の受験生で、孫のハイジに「やり方間違っていない？」と指摘されながらも大して深く気にする様子もなく、「勉強法がよくないのかな」などと語り合いながらのどかにアルプスの山路を辿って行きます。これはこれでまた、立派に悟達した仙人の境地ですね。それはこの句の「印税で」も同じ。見事半世紀の星霜に耐え、しかもその瑞々しい純度においてこれっぽっちの劣化を見せた気配もないこの「野望」は、もはや「野望」を越えた何かに昇華を遂げているのではないのでしょうか。

佳作 鉢巻の希望は野望の隠蓑 善寿

「希望という名のあなたをたずねて遠い国へとまた汽車にのる」というのは昔流行った岸洋子の「希望」の冒頭の一節。思えばそんな儂く縹緲たる佇まいが「希望」というものの本来のありようで、政治やら何やらの現場で勇ましく鉢巻を締めて呼号される「希望」など、もうそれだけで胡散臭いという見解も、或いはなお、なかなか根強いかも知れません。「野望」を一概に嫌う

気はありません（例えば、ゲーム「信長の野望」は、結構ハマりました）。問題は、それを「希望」と呼ぶ「おためごかし」です。「野望の党」。いいではありませんか。少なくとも「希望の党」よりは潔い開き直りがあって、よっぽど詩的です。もともと、だからと言って、総選挙でその党に投票するかどうかは全く別問題ですけど.....。

自由詠

1位 あの世にはあいつがいるのか逝きたくもなし 清志

いつの世でも、どんな場合でも、ライバルというのは屢々目障りで鬱陶しい反面、同時に己を磨き高める最高の砥石でもあり得る存在です。思えば、ここでの「あいつ」は死してなお、こちらに更なる健康管理や長命へと駆り立てるありがたい「強敵」（ちなみにこの「強敵」にルビを振って「とも」と読ませるのは昔流行ったマンガ「北斗の拳」をその嚆矢とする、今や日本のサブカルチャー界の伝統とも言っている一つの美風ですね）。「死せる孔明、生ける仲達を走らす」とは正にこの句の境地そのものではないでしょうか。

2位 さらさらと排除のあとの蛙顔 ふみを

「蛙の面に小便」。詩的な諺です。確かに、蛙の顔はいつでもどこかあつけらんとして、何をされてもどこ吹く風とよそっぽを向いて口笛を吹いているような大物の風格がありますね。恐らく、最初にこの諺を考え出した詩人は、幼少時、本当に蛙に頭から小便をかけてみたことがあったのでしょう——多分、単なるいたずら心から。そして、その挑発を余りに平然と受け止め受け流すこの緑色の小動物の不敵な佇まいに、次第に一種の「恐怖」と「憎々しさ」を感じ始めたのではなかったのでしょうか。「悠然と泰山を見る蛙かな」（古川柳）。そう、敵はなかなかのツワモノなのです。こちらも、重々心してかからねば。

佳作 せせらぎに月下独酌肩ゆるむ 筑三

肩ひじ張って突っ張って生きてきた、その緊張が川音と、月光と、美酒にほだされて一気にゆるんだのですね。思えばそのゆるみこそが川柳、ひいては「風狂」の真骨頂なのでしょう。そうです。我々も、どんな時代でも、「悠然として泰山を見る蛙」の心を大事にしなければ。そうすれば、そんな折々にふと口をつく我々の詩も、まるで清流の河鹿蛙のような澄んだ音色を天地に響かせるかも知れません。

最後に入選・佳作以外に筆者が独自に選考した、名前入りの詠草を十句ずつご紹介します。

詠題（野望）

野望込め排除と言えば皆落ちた 雅樹
三本の野望の矢を持ち希望かな ふさ

一言で野望潰えた希望の党	清志
夢に火を点けて野望にしてしまう	詩夏至
かの野望くだけ散らせたきれいな眼	筑三
野望から打算を引けば「志」	昌憲
ぞろぞろと野望なくしたゾンビたち	喜の字
諏佐之男の野望いたずら啼きいさち	ふみを
野望持ち忖度したが効果なし	ますみ
死ぬまでにせまってほしい壁ドンで	裕香

自由詠

ずーっと落ちていく冬の夕陽	たか子
あら あらら小池にドジョウいなくなり	武彦
為政者が簡単に出す人の金	喜の字
自己流かそうか全てを極めたか	ふさ
閻魔様ことの多さに腱鞘炎	ますみ
世の別れ姫さまだっこで棺おけに	裕香
ハローグッバイ峰不二子総選挙	詩夏至
ぬれ鼠当らぬ予報は怒髪天	雅樹
お見合いが安全ですよ！娘さん	昌憲
国難に北風吹いて自民勝つ	善寿

それでは、皆様、どうぞよいお年をお迎え下さい！
来年も、どうぞよろしくお願い致します！

(了)

第五章 (その2)

これらの回想録は、大戦の最初の冬に関係しています。私がジュリーの森を知ったのも冬であり雪によってです。人々はメッツからフリレイへの道を進んでいました。そして、左側の低い森の広がりの方へ降りて行きました。最初に三三九隊とその調理台がありました。次には若木の雑木の森があり、何本かの樹木と一緒に小石だらけの塹壕と針金で一杯でした。そこには大きな金網が作られていて、家禽の放牧場の様でした。私は時々そこで道に迷い、避難所を探しました。森の中での砲撃が、樵が仕事をしている様に鳴り響いています。電話交換兵は、そこでは屢々一人で電話線に伝って行き、切れているのを見付けます。元気付けてくれる援軍は全然おりません。従って砲兵たちの避難所はまるで楽園の様なものでした。思考するためには、この避難所が妨げになるものは何もありませんでした。そこは何本もの枝の上にある僅かな地面に過ぎませんでした。酷寒のパリで見られた様に、そこでは焔炉の中でコークスが燃えていました。そこから溝を十メートル行くと、森の外れの一種の監視用バルコニーへ到達します。そこからは下方約三百メートルの処に、不気味な森であるフランス側のルミエールとドイツ側のラ・ソナルの間にある草地が見えます。この草地に二本の塹壕が進み、二本のうち的一本には我が軍の歩兵たちが眠っていますが、早い意味が倒れているのです。これらの死体を数えると二百体以上あると私は思いました。二時間の見張りの間に、私はそこで奇妙な考えに襲われました。この草地を横断しようとしていた若者たちをどの様に運び出すのでしょうか。彼らには大変な名誉がなければなりません。そして実際には昔のスイス人たちも、どんな君主でも構わずに任務として全く同じことを行っていたのです。集団の精神、先輩の模倣、行すべき事を行わない怖れというものがあります。それらは危機的な時には恐怖よりも強いものになるのです。それ以来、私は「野営地にて」を表題とするシュランベルジュの報道や「ポーランの勤勉な軍人」誌に、この感情が良く表されているのを発見しました。もしも時々十分に決然とした行動を是非とも必要とする勇氣を持つ様に、常に考えさせる軍人精神を私が持っていたなら、私が知る限り、他にもないこれらの二つの作品に私の真の肖像が発見されることでしょう。そして私には、ノートン・クリュの莫大な編纂を一行ずつ読んだ全ての人々の様に、文学としても十分に情報が与えられています。しかし私が話しているこの素直な感情が、それらを受感する殆ど全ての人々を知らないこともあり得ます。行わずに待っている人々のものである恐怖や憎悪の時間を思い出すことで、人は寧ろ思考します。そして恐怖がその時の私を支配した様に、恐怖がその時を支配します。避難所を探しながら私も、雉子や鶏の様に金網にぶつかりました。全く動物的なこれらの行動は、戦争の原因を何も説明していません。これらの孤独の時間に私は『マルス』の数々の章を書きましたが、それらは枝葉末節を完全に抜かして、自分自身の勇氣に基づいて人々の注意力を連れ戻すことをより一層重要と判断して、軍隊の奴隷制度とその続きである節度の無い醜悪さの主な原因を書きました。私は、右翼に弾丸除けのあるバルコニーで、ヒュウヒュウという沢山の砲弾の音とバチツという弾丸の音に忙しくすることも無く、監視兵の仕事を手早く行うことだけを考えていました。そして、どんなに嬉しかったかを私は思い切って言いますが、私がメズレイの砲兵中隊の四点の火が点いているのを見た時、それに基づいて直ぐに我々の角度測定器具を向けました。次にバ

ルコニーの手摺に凭れかけて、接近する四羽の鳥の鳴き声を聞くために約十二秒待ちました。鳥たちは上空を通り過ぎ、森の中の空中に響き渡りました。ル・バルブユ中尉は、その時が砲兵にとって重大な時間であると言いました。その時に、この大砲に合致した我が軍の砲弾を持って来るのを測定しているのが見られました。少なくともそれは信じられていました。距離を百メートル誤ることは、謂わば無駄になるのです。その反対に何発もの銃弾を受けるだろうと推測した者には、それは安全になります。空想的に理解して下さい。何故なら偶然の最も奇妙な銃弾も、最後には事が起きる様になるからです。私はフィレイでこの種の偶然を電話で聞きました。鋼鉄で覆われた監視所が重要でしたが、それは監視所のための二本のレールの中に、一本の溝も一緒にありました。私は最初、負傷していた電話交換兵の識別し難い呼び声しか分かりませんでした。間もなく次のことを知りました。労働者たちが監視所の前方を通過するのが見えましたが、彼らは通常の時限弾を四発そこへ送っていたのです。それらの時限弾のうちの一発は、空中で爆発しないで、照準眼鏡と着弾観測将校の頭を奪い、避難所内を爆発して、まさに溝を通って行きました。ヴェルダンでは飛行士が、頭の無い弾着観測将校を連れ帰ったこと、そして彼の意見によれば砲弾に出会ったのは、空中をあちらこちら回っていた我が軍の砲弾の一つであったことが語られました。この問題の議論から、ゴンティエもその他の技術者たちも一緒に本当らしいことと、疑わしいことについて一つの考えが生まれます。私が言ったのは次のことです。私たちの感情に殆ど答えない者、そして如何なる成功も掴まなかった者は、私の頭から正確に一メートルの処とか、百メートル五十センチメートルの処とか、あるいは一定の他のどんな距離の処にもある一発の砲弾も又、まさに正確に私の頭の通過と同じ様に疑わしいものであり、又本当らしいものでもあったのです。要するに発砲は完全に疑わしいものであると言うまででしか無く、絶えずそういうことにしかならないと私は結論を引き出しました。三人の友人たちが自ら求めなくても、まさしくコンコルド橋での出会いには如何なる可能性があるのでしょうか。そうなのです。勿論、彼ら三人の友人たちが存在しているのは、彼らの人生の各瞬間に何時も確かな三角形を形成しているものであり、その角度と側面が独特なのです。この三角形にとっては如何なる可能性があるのでしょうか。この観念は、取分けそれらの可能性の段階が私たちの想像力の中だけにある時には、遠くへ導いてくれます。それは物理学者の先生たちを少し笑わせるまで、物理学者の徒弟を導くことが出来るでしょう。しかし俗悪な言葉を繰返し言うのは如何なる偶然か、これらの頁が少しは技術者以上の精神によって、あるいは技術者によって注意深く読まれるのは如何に弱い偶然か、これも又同じ言葉なののでしょうか。しかしながら、この偶然は私の真実の偶然です。そして私が何か出来るとするなら、それは抽象的な精神と、常に大いに信じたり納得させたりする傾向のある制作者を立て直すことです。私が最良の人々の中で私の論争的な諸観念に、それらが私の中で持っている重圧を与えるに至るのは大変に遠回しのこの奇妙な道によってです。遠慮の無い二、三人の弟子は、全て私が希望していることです。でも、実際は完全に希望していないのです。私が存在し得たものが私なのです。そして全員が健康です。そこには監視所の真の思想があります。

或る夜に、B少佐が我慢強くなかったのを私が知ったのは、そのバルコニーにおいてです。彼は電話をしていて、そこで私と会って非常に満足していました。何故ならエッセイという町をきれいに焼き払わなければならなかったからである、と彼は私に言いました。私は見詰めている場所を知りました。私は砲弾が通過する音を聞きました。でも、我が軍がフランス人であっても

、焼きに行った人々を私は殆ど心配しませんでした。この種の観察は兵隊の心を打ちません。単に私は炎が上がるのを待ちましたが、何も見ませんでした。「エッセイが何処か、あなたは良く知っていますか」。彼は地図で説明しました。結局、彼は中尉を呼び寄せました。彼も又何も見ませんでした。私よりも身を守るのが上手なのは確かです。このB少佐は、監視所へ来たことが一度もありませんでした。私は理由を尋ねます。それで、そこに来ないとする、その理由も私は尋ねます。彼は、そこで人が見たものを知りたいのだと言いました。どんな戦争も見識の無い長たちによってその様に行われるのですが、知識は信じていました。私がここで分かるのは、恐怖よりも自負の方が多いことです。一人ひとり自分が望んでいるものを信じていますし、B少佐は一つの見本でした。かくして彼を喜ばせるためには、我が軍のベルタ砲が発砲する度に、腕や足が飛び上がるのが見られたと言わなければなりませんでしたが、その正確な太さは二二〇ミリで、せいぜい五キロメートルの射程でした。人はそのことも彼に言いました。同じ理由から調整工の上等兵は、「分かりません」と答えて長を激怒させないで「大尉殿、命中です」と、外の言い方を知らない有名な南仏人の様に言うのが得だったのです。以上は、如何に大砲を発砲するかですが、ゴンティエが言った様に、それは敵に対して更に大変な危険もありました。この問題について、私はここで将校たちが知らないことを書きたいと思います。夜間の砲撃において最後の斉砲撃は、何時も全て狙いを高く定められます。つまり定められたどんな距離よりも向こう側の遠方です。それは「獣医の砲撃」と呼ばれています。私は、我が軍の砲台のことを話しています。それは九五ミリ砲ですが、大変に丈夫で、七五ミリ砲よりも確かに正確で、射程は九千メートルであったことを私は言ったでしょうか。これらの砲弾は一二〇ミリ砲や一五五ミリ砲の砲弾の様にメリナイト (1) を全て詰め込んだ薄い鋼鉄の薬室で、私は誰の発明か知りませんが、細長いこの砲弾によって怖れられていました。この技法はその後、敵に模倣されました。ピクリン酸爆薬の爆発は、如何なる砲弾よりも優る速度を鋼鉄部分に伝えて、この斉砲撃は恐ろしい程に有効です。我々は、鉛を平らにしたものの中に何列も沢山並べた球で出来た砲弾で一杯にしながら、一度ならず一般的な砲兵のやり方を笑いましたが、それらの榴散弾は砲弾の速度に過ぎず、直ぐに失速しました。これらの成果は空中で炸裂する時限弾の時には僅か滑稽でしたし、着発弾の砲撃の時にも何にもなりません。時々爆発した円錐の底には数々の球がありました。そして、そのことは容易に予測されましたが、機関車に風切りを設ける人々 (2) は何でもやりかねないのです。

ジュリーの森の避難所で、私は注目すべき戦争人間で、墓掘り人の仕事をしているジャンナンと知り合いになり始めました。既に彼には気付いていました。大尉が優しくも無く、厳しく取扱っていたことにも私は注目していました。彼は読み書きを習うことへの驚くべき執拗さで有名でした。読むことを覚えるのは大変に困難であると思わなければなりません。この問題に大尉はこう答えます。「ジャンナンよ、新聞に何が書いてありますか」。「私は分かりませんが、読みます」。彼は薪を割る様にして少しずつ読みました。でも、この非識字者は敵の砲台、飛行機、危険地帯、斉砲撃の時刻と継続時間のことは誰よりも良く知っていました。彼は砲弾が作った穴で洗濯しました。そして、あなたはパリで着ている様に白くなったワイシャツを見せてくれるに違いありません。戦争の危険を脱して復員した彼は、平和になってから或る時、車の中で自殺しました。私は従って彼のことを全く自由に話すことが出来ます。彼は大変に偉大な人でした。土木工事人として家を建て、取分けテラスの職人でした。赤毛の頭は有能で、優しそうではない

が陽気そうな青い眼をしていて、額は考え事をしていることで凸凹になったと言われていました。しかしながら暴力がこれらの特徴を全て支配していたのです。そして彼は何時も私にバルザックのミシュ(3)のことや、宿命で定められた赤い糸を求めていたその首のことを考えさせました。彼は何時もの様に、真のブルトン人がそうであった様に危険の中でも平静でした。戦火近くの地面に腰を下ろしたこの未開人を、今は想像してみてください。そして襤褸(ぼろ)の軍服になっても可能なものとして纏まっていた。その横にはル・バルビュと私がいいます。もう一人の監視兵はバルコニーにいました。私たちはそこでは大変に平静でした。そして若者と老人の二人の生徒は、学校の騒動を語りました。ジャンナンが、不真面目なこれらの小市民たちに一種の怒りを込めて声を掛けたのはその時です。「そんなことを聞くのは不幸である。何も知らない私は単に読むことも知らないが、あなたの立場にあつたら愚か者にならずに勉強した様に、私は大いに学びたかったのだ」と彼は言いました。ル・バルビュは又、ブルトン人でもあり、赤毛でもあり、赤毛では無いもう一人の者よりも少し若かったです。私は二人のこの英雄の間で楽しんでいました。彼らが二人とも係わった前線での恐ろしい地面の凸凹を私は会得していません。従って私の思想は常に解放されていて、私の怒りは頭によって歪められます。私はそのことを残念に思っていました。その思想を手に入れるには、兎の穴の中で冬の一夜を過ごさなければなりません。でも、両名が私を軽蔑しなかったのは私には慰めです。私が四七歳に近づいていたことに注目しましょう。そして、彼らは私の息子になれたかも知れなかったのです。私たちは状況により、そこでは必然的に三人とも平等でした。しかし私が最初に知り合った彼らは、私に年齢のことを思い出させました。それは彼らの最初の指摘でした。「あんたはここで、その歳で何をするのか」。私は特に老けて見える様ではありませんでした。しかし、人は何時も年相応に見ていると思わなければなりませんし、あなたは年相応に見えないと言う人々も従って最初の評価を訂正するのが真実です。私がこの年齢の問題に触れるなら、私がそこにおいて外の処にもいれたことを仮定しても、部隊の連中の眼には何時も眉をひそめるものであったことをつけ加えて言いましょう。でも、彼らは決してそう思いませんでした。ゴンティエは或る日、私のことに関するこの指摘に言おうとしていました、「あんたは年寄りに見えるが、上等兵と同じでは無いな。階級を下げられた植民地兵の曹長に見えるよ」。

ジャンナンは、私が親しい関係にあつたWと共に、無二の戦友です。私は野营地の中で何人かの怒りっぽい人々には期待しませんし、最早再会することはありません。これは平等への試みだったのです。彼らとも親しい関係にありましたが、決してその試みを行わなかったと私は良く考えました。そして、それは私が彼らと同じ二十歳になろうと試みて終わりになりました。権力者が高齢者に恥を搔かせないなら、高齢者は何処でも尊敬されますし、大変厳密になります。ジャンナンは従って私の弟子であり下僕でしたが、私もこの状況を受入れました。このことは何時も完全ではありませんでした。夏の頃には激しい口論になりました。どの様なものかは次のとおりです。私たちの一員になった見習士官がやって来ましたが、彼は大変に不規則なこの小さな兵士隊の責任ある長でした。この見習士官は、若くて礼儀正しい小市民で、勇敢で、熱心で、パリ中央工芸学校を卒業していました。私は彼の実力が軽蔑されない様に注意しました。ジャンナンは賭博好きで、いかさま師でもあり、相手を引きずり込んでいました。そして少しずつ彼らは賭場を開き始めました。そして、夜のテーブルには見知らぬ者たちも引き寄せていたと理解して下さい。私たちが眠っている間に、タロットカードからバカラになり、よそ者たちは巻き上げられ

ていました。私たちはそのことを知っていました。私はそれに手を出さず、見習士官も同じ様に手を出しませんでした。そうすると彼らはタロットのことを話したり、バカ口で賭けるための対策がとられる様になりました。私も驚いた対策です。行動しなければなりませんでした。ジャンナンと相手は私たちの家から追い出されました。抵抗をしましたし、私も怒りました。私は既に上等兵でした。でも、そのことは殆ど考えませんでした。しかし私は、強制された服従が何であるのかを知りました。ジャンナンは怒りを冷静に変えて、私たちの家の背後にある無人の家で、砲弾を引き寄せるための一つの灯りと共に夜な夜な過ごしました。私たちを燃え立たせるための、干し草用の屋根裏部屋の高さにあるストーブの管を取り外しました。これらの事物は完全に私の得になる様に思いました。私は相手の人々に道徳を課する時には決して鼻に掛けませんし、何回も教わった格言からそこへやって来たのです。「道徳は少しも隣人のためにはない」。それ故に全ての人々は許されましたし、真の実力はその様にして見出されました。ジャンナンは馬たちの間に送られて、曹長にいじめられました。その後、彼も同様に許されたのを私は見ました。私は、羊毛で出来た金モールを全然考えないでいる或る人物に、一つの命令を出すことが二、三回起こりました。そしてその上、上等兵は殆ど重要ではありません。しかしその時、私は決して屈しませんでした。時々下位の者による脅威もありましたが、それは私を正しいものにする方法ではありませんでした。私には後悔がありました。そして要するに、私は何にでも準備するに至ったのです。そこから私はもう一つの格言を又引き出しました。「上官になるな」。この観念は将来のもので、強固で学識の深い人が沢山いる様になると、奴隷たちの間に取り残される様になる日にも、最早奴隷たちはいない様なものになるでしょう。しかしそれは私が書くに至るであろうCのための作品になるのです。ジャンナンはそのことをそんなにも長く考えませんでした。私は何時も彼を政治には完全に無関心であると見ていました。彼は見たものしか認識しませんでした。「それでは我々と一緒にいるイタリアは、イギリスのそばにある国ですか」(4)と尋ねるのが彼なのです。地図を描かなければなりませんでした。しかし地図を読み取ることは、知性の一段階を示します。まさに完成に向かうのでしょうか。

ジャンナンは戦場で本を開いて読みました。彼の政治は勇敢になることでしたし、最後の手段として歩兵隊の自分の仲間と連絡を取りに行くのを求めることでした。ジャンナンは守られていました。何故なら大砲の発砲を調整するためには歩兵隊の方へ行く様に、どんなに難しい遠征でも夢見る様な仲間であったからです。ジャンナンの運命は、かくして怖れられている軍団から到着する命令に依存していました。その時ジャンナンは必要な人間でしたし、彼は決して恐怖で飛び上がることなく、上手に見たり聞いたりしてあなた方の命を救う人なのです。大尉と一緒にこれらの遠征の次に、ジャンナンは砲台や飛行機の偵察手に任命されて、良く磨かれたバンドと一緒にトランペットを肩から斜めに掛け、誇り高くして散策に出ました。彼のやり方は表敬訪問により友人たちに慣れることでしたが、それは膝をつき合わせて相手を模倣しながら、大変上手に最も礼儀正しい言葉遣いになりました。彼の欠点は下士官を任務へ追い払うことで、一度は拳骨を貰ったことさえありました。彼は馬たちと一緒に再び追い払われましたが、その後姿は汚く侮辱された森の狼に似ていました。私には彼を救済する、一連の砲撃の誇りを思い出させるための密かな方法がありました。(何故なら、かくして噂されてもいるからです)。しかし私は取り返しが付かないことを恐れました。彼には深刻なことなどは何も無かったのです。(完)

(1) メリナイトは、ピクリン酸を含む強力爆薬である。

(2) 当時の機関車には、前方が細くなった風切りが設けられていて、それで早く進むと考えられていたが、アランは当初からその効果を疑問視していた。

(3) ミシュは、バルザックの小説『暗黒事件』（一八四三）に登場する下男で、フランス革命で死んだシームズ伯爵夫妻の双子の兄弟を守った。最も偉大な作品の一つであるとアランは言った。

(4) 第一次世界大戦中のイタリアは、1915年4月26日に英仏伊間でロンドン協定を密かに結び、5月にオーストリア＝ハンガリーに宣戦布告し、その後ドイツに対しても宣戦布告した。

執筆者のプロフィール（五十音順）

出雲 筑三（いずも つくぞう）

一九四四年六月、東京都世田谷区下北沢生まれ。千葉工業大学工業化学科卒。混迷と淘汰のたえない電子部品の金めっき加工を手掛けた四十五年を無遅刻無欠勤で通過した。芝中時代は実用自転車1000mタイムトライアルで東京都中学新記録で優勝、インターハイでは自転車ロードレースでチーム準優勝、立川競輪場での個人2000m速度競争において総理大臣杯で三位となった。趣味として歴史と城物語をこよなく信奉し、日本百名城に挑戦中である。仕事面では日本で最初の水質第一種公害防止管理者免許を取得、そのご東京都一級公害防止管理者、職業訓練指導員免許など金属表面処理技術者として現役で勤務している。三行詩集『走れ満月』（二〇一一年三月）・『波濤を越えて』（二〇一二年九月）・『五島海流』（二〇一七年五月）を出版。埼玉県所沢市在住四〇年になる。日本詩人クラブ会員。時調の会・世界詩人会議会員。

北岡 善寿（きたおか ぜんじゅ）

一九二六年三月十日生まれ、鳥取県出身。文化果つる所と言われたばかりか、県下の馬鹿の三大産地の一つという評判のあった農村に生まれ育ち、一九四三年に出来の悪い生徒が集まる地元の中学を出て上京したが、一九四五年三月現役兵として鳥取連隊に入隊。半年後敗戦で復員し再上京。酒ばかり飲んで無能なジレットにすぎなかった。大学のころは今は故人の北一平や東大生の本郷喬らと同人誌「彷徨」で一緒。一九七四年文芸同人誌「時間と空間」創立同人。二五号から六四号（終刊）まで編集担当。一九九四年「風狂の会」会員となり現在に至る。詩集『土俗詩集』（一九七八年）、『高麗』（一九八六年）、『樞』（一九九一年）、『痴人の寓話』（一九九四年）を出し、詩集以外のものとして随筆集『つれづれの記』（二〇〇三年）、『続・つれづれの記』（二〇〇九年）、『一読者の戯言』（二〇一四年）を出版。日本詩人クラブ永年会員。日本ペンクラブ会員。風狂の会主宰者。

高 裕香（こう ゆうか）

一九五八年二月二日生まれ、大阪市出身。幼い頃から、日曜日になると父親に大阪城公園に連れていってもらい公園中を駆けめぐる。菜の花畑やレンゲ畑で ちょうちょうやトンボを追いかけたり、おたまじゃくし、ザリガニを取って遊んでいた自然児。なんとなく父からルソー教育を受けていた。五歳からピアノを習う。大阪基督教学院の児童教育学科を卒業後小学校教員になる。現在、東京韓国学校で日本語の講師を務めている。日本語教育学会会員。ヤマハピアノPSTA指導者。「心のアルバム」・「虹の架け橋」・「赤い月」・「日韓文化交流合同詩集」などのアンソロジー詩集に参加。二〇〇七年度「民団文化賞」優秀賞受賞。二〇〇九年、二〇一一年度「民団文化賞」佳作賞受賞。日本詩人クラブ会友、時調の会・世界詩人会議会員。

神宮 清志（じんぐう きよし）

一九三七年一月九日、盧溝橋事件のあった年、徳富蘆花の住処の近く（東京府千歳村）で生まれ、幼年時代をそこで過ごした。二歳で父に死に別れ、敗戦前後の混乱の中、引っ越すこと十回あまり、小学校時代から働き、冬でも素足で過ごすという貧困の中で育った。大学卒業後サラリーマンとなって暮らしは安定し、三十歳代半ばに能面師に弟子入り、以後三人の師匠についた。個展四回、団体展出品多数、最近では創作面も作り、イエス、ジャンヌ・ダルク等も作成した。能面制作はほぼ毎日ながら、最近視力・体力の衰えもあり午前中のみ、午後は筋肉トレーニングとボールルームダンスに打ち込んでいる。いっぽう随筆同人誌「落」に四十年ほど在籍して、二百二十編の随筆を発表してきた。手作業をしていると、思いと考えが限りなく浮かんできて、書かずにいられない。いわば物狂おしいため息のようなものか。

高村 昌憲（たかむら まさのり）

一九五〇年三月、静岡県浜松市生まれ。明治大学文学部（仏文専攻）卒業。詩集は『螺旋』（一九七七年）、『六つの文字』（二〇〇四年）、『七〇年代の雨』（二〇一〇年）。評論集『現代詩再考』（A&E・二〇〇四年）。翻訳は『アランの「エチュード」』（創新社・一九八四年）、アラン『初期プロポ集』（土曜美術社出版販売・二〇〇五年）、ジャン・ヴィアル『教育の歴史』（文庫クセジュ971・白水社・二〇〇七年）。共同編纂『齋藤志詩全集』（土曜美術社出版販売・二〇〇七年）。一九九八年に「現代詩と社会性—アラン再考—」が詩人会議新人賞（評論部門）。二〇一二年から電子書籍（パブー）に、随想集『アランと共に』及びアラン作品の翻訳『一ノルマンディー人のプロポ』『神々』『わが思索のあと』『思想と年齢』『ガブリエル詩集』などを登録中。日本詩人クラブ会員。

なべくら ますみ

一九三九年 東京世田谷生 日本大学文理学部国文学科卒業

日本現代詩人会 日本詩人クラブ 時調の会 各会員

櫻自由詩の会同人

詩集『同じ空』『城の川』『色分け』『人よ 人』『川沿いの道』『なべくらますみ詩集』『大きなつばら』

エッセー集『コリア スケッチラリー』（共著）

訳詩集『花たちは星を仰ぎながら生きる』（韓国・呉世榮）他

原 詩夏至（はらしげし）

詩人・歌人・俳人・小説家。一九六四年生まれ。東京都中野区在住。著書に詩集『波平』『現代の風刺二五人詩集』（共著）、句集『マルガリータ』『火の蛇』（第十回日本詩歌句随筆評論大賞俳句部門努力賞）、歌集『レトロポリス』（第十回日本詩歌句随筆評論大賞短歌部門大賞）『ワルキューレ』等。小説集『永遠の時間、地上の時間』。

日本詩人クラブ・日本詩歌句協会各理事。

日本現代詩人会・日本短歌協会・現代俳句協会各会員。

三浦 逸雄（みうら かつお）

一九四五年四月二日 札幌郡琴似町で生まれる。

一九六七年上京し 高円寺フォルム美術研究所、新宿美術研究所に通う。

一九七〇年スペインに渡り、マドリードの美術サークルCircro de bellas artesで人体デッサンをかさねる。帰国前の一年は、ベラスケス、グレコ、ゴヤ、ムリーリョを見るために、プラド美術館へ足繁く通う。一九八三年に帰国。

一九七五年以降、現代画廊（東京・銀座）、東邦画廊（東京・京橋）他で作品を発表する。

（以上）

読者からのコメント（2017年11月号）

アラン『大戦の思い出』（六）：大戦の体験者の言葉は重いと思いました。戦場では誠実に兵役に就いている。戦場の様子、大殺戮、虐殺、捕虜、スパイのことなどを知りました。戦争や権力の濫用、非常識な富の集中は人間の誤りだ。人は自分の意志だけによって支えている希望以外に希望はない。戦争は人間を素っ裸にし、道徳を侮辱するなどが心に残りました。

伝説の一手：将棋のことは全く分からないのですが、奥が深いですね。対局や歴史を知り、すごい記憶力に感じ入りました。

三浦逸雄の世界（二十四）「午後の室」：何かを考えているように思いました。自分の内面でし
ょうか？

アフター三百年：誕生日の遊山でしょうか。川越から水上バスで東京見物良かったですね。

腕時計：十数年ぶりに動き出したカルチェ、ずっと動き続けているクレドールの腕時計。高級品にはそれなりの良さがあるですね。

登山電車の優しさ：年に一度、兄弟二家族で行かれる温泉旅行。箱根の紅葉狩り、いいですね。娘が強羅に居たときに、よく出かけました。兄弟仲良く幸せな様子をご覧になって、ご両親も喜んでますね。

点景：メーデーの日。鳥が広い公園の芝生に集まって、静かにしている。遠い日、メーデーに参加して、労働歌に声はりあげたことを思い浮かべています。企業の預貯金残高増のニュースを聞くと・・・生きずらくても、鳥のように飛び立てないのですね～。

あっち側とこっち側：お父さんとおねえちゃんと少年が、お父さんの育てた野菜を売りに来て、おばさんが買ってくれた。少年の喜びが生き生きと伝わってきました。

蝉：陽気なお人好しの蝉の、歓喜の音が永遠に鳴り響いている、というところに共感しました。

（以上）

同人誌 風狂 (ふうきょう)
第41号 (2017年12月21日登録)

<http://p.booklog.jp/book/118830>

編集：風狂の会 (担当：高村 昌憲)
編集担当者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/masanorit/profile>

感想はこちらのコメントへ
<http://p.booklog.jp/book/118830>

電子書籍プラットフォーム：パプー (<http://p.booklog.jp/>)
運営会社：株式会社トゥ・ディファクト